

真夏の暑い日のこと。

うだるような暑さと朝早くからの現場作業に疲れ果ててしまう毎日。
そんなところに遠方からはるばるこの土地に遊びに来るといのが何人かいた。

観光もかねてやってくるのだろうと思ったが、せっかく来てくれるのだからと私も飲み会には顔を出しておこうと考えた。

一ほどなくして飲み会が始まった。

ゲストは2人。

1人はIT企業に勤めるサラリーマンとの事だったが、事業がうまくいっているのだろう羽振りがよさそうだった。

もう1人は2人の子供を育てていると聞いていたが今日は独りだった。

名前はアキと言った。

アキは30代だが小柄でやせ型の印象だった。小動物のように人の陰に隠れるような大人しい女。

黒髪というよりもやや栗毛色の混じった明るい髪質。胸はやや小ぶりだが2人も子供がいるとは思えないほどスレンダーな体型をしていた。

本当に30代かと思わせるような女だった。

飲み会が始まりワイワイと盛り上がっている。すると、何故か周りがアキと私を隣同士で座らせようとする。

いつの間にか私の隣にアキが座り周りも満足したのか何事もなかったかのように宴が続いた。

2時間もすると酔いつぶれてくる奴も出てくる。

そろそろ頃合いだろうと見計らって飲み会がお開きとなった。

ぽつりぽつりと名残惜しそうに一人、また一人と帰っていく。

私もそろそろ帰ろうと挨拶を済ませたところ。アキも一緒に帰ると言い出した。皆と少し離れた時に「ねえ、送って行って？」と言ってきた。

特に断る理由もないので車の助手席に乗せアキの泊っているホテルへ送っていく事にした。

車内では他愛のない話をしていた。
お互いの好きなことや今日の飲み会の話。

この土地での彼女の思い出話など本当に他愛のない話を話した。
話したとはいってもほとんどが、アキの話を聞いて相槌を打つことしかできなかったのだが。

10 程でアキの泊るホテルの前についた。
ビジネスホテルといっても安宿で昔からあるボロボロとはいかないまでも安宿というのがすぐに分かった。

アキは「もう着いたんだね。」とポツリとつぶやく。
一呼吸おいて「どうして？」と聞く。

うつ向いたままのアキ。
ふとアキの左手が目に入った。

結婚指輪がない。

尋ねるかどうが一瞬迷った。
もし、聞いてしまえば引き返せないのではないだろうか。しかし、動こうとしないこの状況がそのまま続くのも良くはない。私は意を決して「結婚指輪してないけど、どうしたの？」と聞いてみた。

不器用な言い方しかできなかった。その言葉を聞いてアキは大粒の涙を流しながら泣き出してしまった。

何が起こったのか狼狽える私は、アキの背中をさすり胸元へと手繰り寄せる。

「大丈夫だよ、大丈夫だよ。」

となだめながら落ち着かせる。

「ごめんね、色々と抱え込んでしまってた。つい・・・ね。」

心情を吐露するアキ。

正直、女が涙を流す姿を見れば男は弱いと考えているのだが、アキを手繰り寄せ抱きしめた瞬間に股間が反応し始めていた。

それと同時に理性のタガが外れはじめ、アキを抱きたいという思いが頭を巡りだしていた。やりたい、犯したい、セックスがしたい。

アキも私の股間が膨らんでいることに気が付いたのだろう。

「ホテルに行こうか？」

アキの泊るホテルの前に車を止めていながらもラブホテルに向かう提案を試みる。力強く頷くアキ。

ラブホテルを探し2人で深夜のドライブへと旅立った。

近くのコンビニで水を二つ買い、ラブホテルの駐車場へ車を止める。先ほどとは違いアキが隣にいただけで胸の鼓動が早くなっている。

受付にあるパネルを押しエレベーターに入った。扉が閉まった瞬間にアキの控え目なお尻へと手を伸ばす。

小さなお尻をゆっくりと指先で円を描くようになぞる。アキの顔を見ると物欲しそうな顔でこちらをじっと見つめてくる。舌を少しだし唇を近づけキスをする。

じゅるじゅるとイヤらしい音を立てながらキスをする。舌先をチロチロと動かしながら絡め、また激しい音を立てる。エレベーターが停止し扉が開く。

キスを止め互いに見つめあう。私が「行こうか」と聞くとアキは「うん」とうなずきながら答える。

アキの腰に手をまわし彼女を隣に据えて部屋の中に入った。

・・・続きは本編で。